

(城西人文研究第19巻第2号)

日本語助詞「は」と「が」

——情報伝達の観点から——

鎌田 精三郎

1. 言語による伝達

ことばは我々の日常生活には不可欠なものである。ことばをもとに自分の伝えたいことを相手に伝え、また相手の情報もことばを通して伝わってくる。ことばは意思伝達の手段であると言うことは誰にも疑う余地はないであろう。

ことばを用いて何かを伝えようとする時には、まず自分の他に何かを伝えたい相手があり、また伝えたい何かの情報がないければならない。その情報を我々は意味を持つ記号の連続に置き換え、伝えたい相手に向かって口から発することになる。有意味な記号の連続は一般に文と言う形式をとって口から発せられることになる。例えば、急に雨が降ってきたことを相手に伝えようとするならば、「今、雨がふってるよ。」と言うであろう。また火事が起こって危険を知らせるような場合に、ただ単に「火事!」とだけ言うかもしれない。これは単語の火事と違って、話者の判断が入っているので文と見なすことができる。

相手に情報を伝えようとする時に、我々は相手に何らかの配慮をしながら話している。まず相手に伝えるべき内容は相手の知らない事が一般的であるとは言え、相手の知らないことのみを突然口から発したとしたら、相手がそれを理解するのに負担を与えることになり、自分の言いたいことが十分に伝わらないかもしれない。そこで我々は、もっと効果的に相手に真意を伝えるために、相手の持つ予備知識を活用しようとする。

2. 新情報と旧情報

相手の持つ予備知識とは、既に相手に知識として入っているもの、相手の置かれていた状況から相手が当然理解・類推ができるもの、一般的真理などである。このような相手の持つ予備知識は旧情報と呼ばれ、我々はこの旧情報を巧みに文中に織りまぜながら、相手にとって未知の情報を伝えようとする。なお、相手のまだ知らない情報は新情報と呼ばれる。

例えば、AがBに友人の John が車にひかれたことを伝えようとして次の(1)を発したとしよう。

(1) A car run over John.

(1)は情報伝達上好ましい発話ではない。これではAはBに対して配慮した発話をしていないことになる。出だしが a car となると、不特定の車の1台しか指さないことになり、余りにも漠然としてしまうので、Bにとっては理解する上である程度の負担は避けられない。この場合は、むしろ次の(2)のような受動文とすべきである。

(2) John was run over by a car.

出だしが John となることによって、聞き手は大幅に理解しやすくなる。AがBに対して(2)を発話するとなると、この二人はお互いに John を知っていることになるはずである。Bにとって知らない人間の話が聞かされたら、全くトンチンカンな話しになってしまうからである。従って、John はAとB両方にとって既知の対象であるから、旧情報と見なされる。以上2つの例から推察するに、発話文の出だしには旧情報が用いられると、聞き手にとっては理解しやすいようである。

これと同じことが日本語でも言える。

(3) 車が太郎をひいたんだよ。

これは太郎が車にひかれたことを伝えようとする発話ではなく、むしろ太郎が電車やバイクにひかれたと言うより車にひかれたことを伝えているにすぎない。

い。このような発話では、太郎が何かにひかれたと言うことが前提になっている。従って、太郎が何かにひかれたことが旧情報となり、「車が」の部分は新情報となるわけである。話し手が聞き手に、単に太郎に起こったある事故について伝えようとするならば、次の(4)のように言うのが最も自然であろう。

(4) 太郎は車にひかれたよ。

この場合も、太郎は話し手と聞き手の両方にとって既知の対象であろうから、旧情報が文頭に来た方が自然な発話となる。

上の例で述べたように、不定名詞が文頭に出た時には、この名詞が旧情報として機能出来ない。従って、そのような文は特別な文脈を考えないと通じないことがある。(1)～(4)の例における run over, ひく と言った動作動詞よりも、次のような状態を表す例の場合がもっとはっきりする⁽¹⁾。

(5) a. ?A box is empty.

b. The box is empty.

(5 a) のように、不定名詞を用いると「箱というものは空だ」と言う変な意味になるか、あるいは「一箱が空だ」と言うような何か特別な文脈でのみ可能な文になってしまう。定冠詞を用いた(5 b)では、ある特定の箱を指し示すことが出来るから、話者と聴者の両方の意識にのぼるものである。従って、the box は旧情報と言うことになり、旧情報が文頭に来る(5 b)は安定した発話文と言うことになる。日本語の場合も、「箱は空だよ」と不定名詞を用いて言われれば、「どの箱が？」と聞き返すかもしれない。むしろ、「あの箱空だよ」と特定化して言う方が、聞き手にとって分かりやすい。このように、英語でも日本語でも発話文の出だしは、特定化出来る名詞、即ち旧情報となり得る名詞が現れた時に、より自然な発話文となる⁽²⁾。

3. 主題と題述

前のセクションでは、旧情報を表す定的な要素が文頭に現れた方が、発話文として好ましいと述べたが、これは何故であろうか？ これに答える前に次の

英文を考慮して見よう。

- (6) Laura Ingalls Wilder was the author of what is considered by many people to be the most acclaimed set of children's books ever written. They were and are universally popular with both critics and children alike.

これは『大草原の小さな家』の作者ローラ・インガルスについて述べたものの一部であるが、この2つの文の主語 Laura Ingalls Wilder と they の働きを見てみよう。最初の文の主語 Laura Ingalls Wilder を、読者の中には知っている人もいるだろうし、また知らない人もいるだろう。従って、これは必ずしも旧情報とはならない。しかし、この部分はこの一節の出だしであり、またこの一節の話題の中心、即ち主題（テーマ）である。2番目の文の主語 they は前の文の一部を受けたものである。前の文で、インガルスは喝采を浴びた子供の本を書いたことが述べられ、話題の中心はインガルスであるが、2番目の文ではインガルスが書いたその本が話題の中心になっている。従って、その本を表す they が主語に現れていることになる。なお、主題のことについて述べられている部分は題述（レーマ）と言う。

次に、主題として機能するのは主語だけかどうかについて考察する。

- (7) “What do you take on hotdogs?”

“Hotdogs I eat with mustard.”⁽⁸⁾

(ホットドックならカランをつけて食べるよ)

- (8) It was a dark, starless night. We were becalmed in the Northern Pacific. Our exact position I do not know. (我々の正確な位置は私には分からない)

(7) の hotdogs, (8) の our exact position はそれぞれ動詞 eat, know の目的語であり、目的語が文頭に用いられたものである。そしてこれらの目的語が上の2つの文では、前の文の話の流れを引き継ぐものであるから、主題として機能している。これらの例から、英語では主題となるのは文頭に現れる要素と言えるようだ。

それではこれから、日本語の場合を考察して見る。

- (9) むかし、むかしのことであります。おじいさんとおばあさんとがありました。おじいさんは、山へシバ刈りに、おばあさんは、川へせんたくに行きました。(坪田譲治『日本のむかし話 (5)』偕成社「舌切りスズメ」より)

この昔話の出だしをもとに、日本語の主題について概観してみる。最初の文「むかし、むかしのことであります」は、この話を開始するための前提提示——これから伝える話が起った時代の設定——である。さらに次の文「おじいさんとおばあさんがありました」は、2番目の前提提示——この物語に登場する二人の人間の提示——である。その次の文では、まず二人の提示された人物の内、一人を取り上げて、その人が山へ行ったこと、次にもう一人を取り上げて川へ行ったことを述べている。

この前提の提示であるが、この部分は聞き手（もしくは読み手）にとっては、全く新しい内容である。聞き手は提示されたこの2つの前提を理解し、その知識をもとに次の話の展開を聞くのである。3番目の文の「おじいさんは」「おばあさんは」は2番目の文で提示されたそのおじいさん、そのおばあさんを指すものであり、3番目の文が語られる時点ではもはや聞き手にとっては旧情報に属する内容である。旧情報に属するものを文頭に取り出しているのは、おじいさんとおばあさんを話の中心、即ちその文の主題として取り立てていることになる。このように、日本語でも主題は文頭に来るようだ。

次に、聞き手にとっては新情報となる2番目の前提提示文と3番目の主題取り立て文の助詞の違いに注目して見よう。2番目の文では助詞「が」が、3番目の文では「は」が用いられている。これは情報伝達において「が」と「は」の使い分けが行われていることを示しているのではないだろうか。

4. 「が」と「は」——文法上の役割——

「が」と「は」は助詞として、従来それぞれ異なる範疇に分類されてきた。

これは上記の昔話の例でも、何らかの使い分けがあることを暗示していることから、想像出来ることではある。特に、文法上の違いについては、次の例が最も顕著であろう。

(10) a. クジラは哺乳動物である。

b. 今、クジラが芸をしていますよ。

もし「クジラ」が述部「哺乳動物である」「芸をしていますよ」の主語であるとするならば、(10 a) (10 b) で「は」と「が」を自由に入れ換えても良いはずであるが、入れ換えると不自然さが生ずる。このことは、「は」と「が」が文法上、区別されることを示すものである⁽⁴⁾。

伝統文法でも山田孝雄は、「が」を格助詞、「は」を係助詞と区別する⁽⁵⁾。山田によれば、格助詞は体言または副詞に付属し、これらが句の構成要素として句の構造に対してどのような資格を持つか明らかにするものである⁽⁶⁾。例えば、「が」が体言に付属し、その体言が用言に対して主位の地位に立つならば、その句は主格となる。「鳥が鳴く」「それは日が長かった時の話しさ」における「が」が主格の例として挙げられている。

山田によると、係助詞は陳述をなす用言に関係ある語に付属して、その陳述に勢力を及ぼすものと規定されている⁽⁷⁾。「は」は、「雪は白い」が示すように、その意味は排他的であり、事物を判然と指定し、他と混乱するのを防ぐために用いられる——判定弁別の意味を表すのである。即ち、「何かが白い」と言う陳述があり、その陳述に対して「その何か=雪」と指定するのが「は」の働きであると山田は述べているのだと思われる。

上記(10)の例でも見たように、「は」と「が」はそれぞれ入れ換え不可能な事が多い。これは「は」と「が」の文法的な働きが異なるためであることは、上でも述べた。それにもかかわらず、「は」は「が」と同様に主格（もしくは主語）を表すと言われることがある⁽⁸⁾。これは何故だろうか。山田(1936)は、格助詞が本来在るべき位置にないときには、係助詞がその位置に加え用いられると述べている。例えば、「私はちっとも知りませぬ」における「私は」は、係助詞「は」が用いられているとはいえ、その位置に格助詞を伴った「私が」

が現れていないから、主格として用いられることになる」と述べている。

柴谷方良(1978)は「は」と「が」が同じ文法範疇と誤解されるいくつかの統語的事例を挙げている⁽⁹⁾。

(11) a. 山田先生が次郎に花子を紹介した。

b. 山田先生が次郎に花子を御紹介になった。

(11 a) の山田先生は主語であり(かつ主格であるが)、一般に主語が(11 b)のように尊敬語化を引き起こすと主張されて来た。

(12) a. 山田先生は次郎に花子を紹介した。

b. 山田先生は次郎に花子を御紹介なさった。

係助詞「は」の用いられている(12 b)でも、(11 b)と同様に尊敬語が引き起こされている。このように、「は」と「が」の間には同じ統語的振舞いが見られる。

次に、名詞「自分」が指すことが出来る語、即ち先行詞は(13)で示すように主語でなければならない。

(13) 山田先生が次郎に自分の娘を紹介した。

(14)の例が示すように、「は」が用いられている場合でも、「は」の付随した名詞句が先行詞になることが多い。

(14) 山田先生は次郎に自分の娘を紹介した。

このように、尊敬語化・自分構文に関して「は」と「が」が同じ振舞いをすることがある。

これらが示すように、統語現象の中には、「は」「が」ともに同じ現れ方をするものがあるために、「は」の付随する名詞句が主語(もしくは主格)と判断されることになるのである。

山田(1936)の言うように、「は」は判定弁別の意味を表すので陳述にある関係を有することになるとは言い、統語的に「が」と同じ振舞いをするところがあるので、付随する名詞句は主語/主格と見なされることがある。ここまでは、主語/主格と区別せずに使用してきたが、この点についてもう少し考えて見る。

- (15) a. 鳥が飛ぶ。
b. 鳥は飛ぶ。

山田 (1936) によると, (15 a) と (15 b) では「が」と「は」が違うだけで後は皆同じであるから, 「鳥」が主格であることは明らかであり, 「が」「は」ともに主格を示すと言っても不都合がないように見える。だが, 主格の語に付随するからと言って, その主格を示す性質を有するとは直ちには言えないはずである。もし言えるとするれば, 次に挙げる下線の助詞はすべて主格を示す性質を有することになってしまう⁽¹⁰⁾。

- (16) a. 鳥も飛ぶ。
b. 鳥まで飛ぶ。
c. 鳥さえ飛ぶ。

(16) の例でも, 「鳥」と「飛ぶ」の関係は (15) の例と変わらないとは言え, これらの助詞がすべて主格の性質をもっているなどとは, 誰も言わないはずである。山田のこのような議論から, 我々は次のように考えることができよう。即ち, 主格と主語とは全く別の範疇であり, 純粹に主格を表すのは (15 a) のみであり, (15 b) ならびに (16) は主格ではないが主語である。当然 (15 a) は主格であると同時に主語でもある。(16) が主語であることは, (17) で示すように尊敬語化が可能なることから理解されるであろう。

- (17) a. 山田先生もわざわざお越し下さった。
b. 山田先生までわざわざお越し下さった。
c. 山田先生さえわざわざお越し下さった。

このように主語であれば尊敬語化を導くことが出来ると言えるが, 次の例は尊敬語化が不可能なもの——即ち「は」「も」の付随する名詞句は主語としては機能出来ないのである。

- (18) a. *山田先生は弟が部屋に御案内になった。
b. *山田先生も弟が席まで御案内になった。

これまでは主語と主格を明確に区別して来なかったが, 以上の例から主語と主格は全く別の範疇であることが示された。上の (15) (16) の例では, (15 a)

のみが主語でありかつ主格である。残りは単に主語としての機能しか持たないということになる。(18)が尊敬語化が出来ないのは、「山田先生」が動詞「案内する」の目的語であり、この目的語が文頭に現れたものである。

「が」が格助詞、「は」が係助詞と区別されるとすると、他にも文法的な違いがこの2種類の助詞の間にあるであろうか。この疑問に対する答えを山田(1936)の中に見つける事が出来る⁽¹¹⁾。上記(15)の文に体言を加えて、「飛ぶ」と言う動詞を連体形としてみる。

(19) a. 鳥が飛ぶ時。

b. 鳥は飛ぶ時。

(19b)は多少物足りないと感じられるが、それはその下に現れるべき語がまだ現れていないからである。山田によれば、「が」は主格を示すものであるから、その勢力は主格の対象である「飛ぶ」にのみ及ぶだけであり、それで「が」の役目は果たされる。(19a)では「が」の示すべき関係は既に果たされているので、「鳥が飛ぶ時にはその姿勢を見たまえ」「鳥が飛ぶ時には空気が動く」などと言っても、「鳥が」と「飛ぶ」との関係は変わることがない。(19b)の場合は、「鳥は」に対して必ず「飛ぶ時に」「どうする」とか「どうなる」とか言うような説明が必要である。(19b)のように、この説明が欠けている時は、省略かあるいは片言であると山田は言う。

(20)のような文では、「鳥は」は「飛ぶ」とは直接関係を持たない。

(20) 鳥は飛ぶ時に羽根をこんな風にする。

この場合は、「鳥は」は「羽根をこんな風にする」と関係を持つものである。山田はこれを「鳥は」は「羽根をこんな風にする」の主格(この稿の結論に従えば、主語の関係)になると述べているが、(21)ではもう主格とは言うことが出来ない。

(21) 鳥は飛ぶ時の姿勢を見たまえ。

(21)における「鳥は」は「鳥をば」であり、「見たまえ」と関係を持つ。

以上(15b)と(20)(21)の例において、「鳥は」と「飛ぶ」が続いているが、(15b)では「鳥は」と「飛ぶ」が結び付き、(20)(21)では結び付かな

いということが分かった。山田はこの違いについて、「飛ぶ」が陳述をなす時は「鳥は」と結び付き、「飛ぶ」がその後続く語の装定をなす時は「鳥は」と結び付かないとし、これは結局「鳥は」の後の「飛ぶ」が陳述をする格に立つか立たぬかということ（言い換えれば「鳥は」を「飛ぶ」の主格とするか否か）に帰すとしている。

5. 「が」と「は」——意味・用法の観点から——

上のセクションでは文法上の観点から「が」と「は」の違いを考察してきたが、本セクションでは意味・用法の点から考察を加える。用法の点からこの違いについて論じたものに久野暲（1973）がある⁽¹²⁾。まず久野の「は」の分析から検討することとする。

久野によると、「は」には(i)主題を表す用法、(ii)対照を表す用法の2種類があるとしている。セクション3で考察したように、主題は文頭にある特定の事柄を取り出して、それから述べる文のテーマとしての機能を持たせるものである。主題として機能させるためには、特定の文脈で誰にでもその指示対象が分かるもの、即ち文脈指示的でなければならない。例えば、次の(22)の太郎は、その会話に参加している者が特定出来る太郎でなければ、会話は成立しないことになる。

(22) a. 太郎は学生です。

b. 太郎は私の友達です。

(23) 二人はパーティにきました。

また(23)における二人とは、全く不特定の二人ではなく、その会話に参加している者の意識にのぼっている特定の二人でなければならない。指示対象が一義的に決まっているもの、例えば太陽や月なども主題として機能することができる——会話の場面では容易に誰の意識にもものぼることが出来るからである。従って、この場合にも「は」が用いられる。

(24) 太陽は東からのぼり、西に沈む。

一般的な真理と言われるものや普遍的な事柄も「は」を用いる。

- (25) a. 人間はいつかは死ぬ。
b. 三角形の内角の和は二直角である。

対照を表す「は」としては次のような例を挙げることが出来る。

- (26) 雨は降っていますが、雪は降っていません。

(27) の例における4つの「は」のうちで、最初の「は」が主題の「は」であり、残りは対照の「は」である。

- (27) 私は週末には本は読みますが、勉強はしません。

このように「は」の用法には、主題や対照があると言うことは会話における情報伝達と言う点で重要な役割を果たしていると言える。これについては、後でもっと詳しく述べることとする。

久野は「が」の用法として、(i)総記、(ii)中立叙述、(iii)目的格の3種類を挙げている。総記とは即ち排他の意味で、「が」で表された名詞のみがと言う意味になる。例えば、(28)では「太郎だけが～だ」と言う意味を表す。

- (28) a. 太郎が学生だ。(誰が学生ですか。)
b. 太郎が日本語を知っている。(誰が日本語を知っていますか。)

総記の「が」は括弧内のような文脈を与えないと、甚だ座りが悪いものとなる。一方、中立叙述の「が」とは眼前に起こっている出来事や状態、一時的な出来事や状態を述べる場合に見られる。

- (29) a. おや、太郎がきましたよ。
b. 雨が降っています。
c. 太郎が見舞いに来てくれた。
d. 机の上に本がある。

目的格が「が」で表される例としては(30)がある。

- (30) a. 僕は花子が好きだ。
b. 僕は映画が見たい。

この久野の考察の中で問題と思えるのは、特に「が」が「総記」や「中立叙述」と言うような意味を持つものだろうかと言う点である。例えば、総記の

「が」はそれだけでは大変座りの悪いものであるから、ある特定の文脈が必要になるとしているが、これこそが「が」の意味・用法と言われれるものが文脈依存であることを示している証拠である。

柴谷（1989）は、「誰が学生ですか」と言う質問に対して、「太郎が学生です」と発せられたら、当然聞き手は太郎だけが学生だろうと解釈するであろう。これは助詞「が」の意味によるものではなく、グライスの言う会話の原則に従うからであると述べている⁽¹³⁾。もし太郎以外にも学生がいるのに、解答者が「太郎が学生です」と答えれば、会話の原則が守られておらず、協調的な会話の参加者と言えなくなる⁽¹⁴⁾。

「は」に関して、主題と対照の違いは文脈によるのではないかと言う疑問が起こっても当然であろう。寺村（1991）は（31）のような例における「山口さんは」は単に主題を表すと考えることも出来るが、ちょっとした文脈に置くならば、あるいはある談話場面を想定するならば、容易に対照的な意味を持たせることが出来ると述べている⁽¹⁵⁾。

（31） 山口さんはお医者さんです。

この文は、単に「山口さん」という人を主題に取り上げて、それについて述べていると解釈されるが、すぐ続けて「奥さんは……」と言いかけると、聞き手はその後には「お医者さん」以外の職業もしくは身分が続くと予想するであろう。寺村によると、「Xは」に対して何等かの影が意識されるか否か、それがどのような影との対比として解釈されるかは、談話の条件によるとしている。寺村は、文中のある要素を特に際立たせ、ある対比的効果を生じさせる働きを「は」の基本と見、それがあある条件下で、対比の相手である影の存在が意識されずに、単にそこに聞き手の注意を引き付けて後の陳述と結び付けるだけの場合を主題を表すものとしている。

以上考察したように、助詞「は」「が」にはそれ自体の特別な意味があると言うわけではなく、文脈や談話の流れの中でそれぞれが果たすべき役割があると考えられる。

6. 題目・提題の助詞「は」——松下文法と佐久間文法——

松下大三郎(1930)では、助詞の「は」と「も」を題目の助辞と言う1つの範疇に分類している。松下によると、「は」は(32)の例が示すように事情の異なる2つを分けて言う働きをする⁽¹⁶⁾。

- (32) a. 父は役所に勤めていますが、私は会社に勤めています。
 b. 外ではおとなしいが内では我儘だ。

この働きは、その後の研究で対照を示す「は」の働きと言われるものである。

松下は叙述と言う点から、「は」の働きについて述べている。彼によると叙述には題示的叙述と無題的叙述の2つがある。題示的叙述とは、予め叙述の範囲を決め、これを題目として掲げて、その題目について判断を下すものである。一方、無題的叙述とは、叙述の範囲を決めず、従って題目無しに叙述することである。(32)の例では、助詞「は」が用いられているが、「父」「私」「外で」「内で」が題目として取り上げられ、その後の部分がこの題目に対して下された解説・判断と言うことになる。だが助詞「は」の用いられていない(33)の例では解説・判断の対象となる題目がない。

- (33) a. 父が商売をしておりましたから私もその商売を継いだわけです。
 b. 外でおとなしいから内でもそうだろう。

(33)では「父が」「外で」はその下の「商売をしておりました」「おとなしい」に対して題目を成してはおらず、「父が」は「商売をしておりました」の主体を表し、「外で」は「おとなしい」の場所を表すだけである。

以上、松下文法における題目助辞について一部概略したが、ここで特に重要と思われるのは題示的叙述と無題的叙述と言う点である。特に題示的叙述こそが、上で述べた情報を伝達する際の主題の提示と言う考えに共通するものであろう。

佐久間鼎(1940)は、「は」(ならびに「も」)を提題の助詞と呼んでいる⁽¹⁷⁾。

格助詞「が」はだいたい事実の報道に参与し、「は」は典型的に判断の表現に関係するとしている。次の2つの例を比較して見よう。

(34) a. 雪が 白い。

b. 雪は 白い。

佐久間によると、(34 a) ではある1つの光景を写し出している——眼前の風物として雪が、雪の景色が展開されていて、それをまのあたり見ている人が、その有様を描写して、あるいは報告して言う場合がこういう表現になり、自然その現前の場というのが裏づけられているし、また想像されるところの表現であるから、(35) に示すような眼前に展開される場面を背負っている表現である。

(35) ソラ、ね、雪が真白でしょう！

一方、(34 b) は (36) のように言い換えることができる。

(36) (一体全体) 雪というものは、白いものだ。

これは判断の表現に外ならない。印象の描写や事象の叙述とは異なり、概念的な内容の事案の説明、事理の解明という抽象的な取扱いになると、事は個別的事実を離れて、一般的な性質のものに関係してくるので、表現上もその特色がそなわって来ると佐久間は述べている。出来事の叙述のように時や所の規定をする必要がなくなり、その事理の通用する限界(妥当範囲)を明らかにする題目の提出が要求される。思考の及ぶ範囲は、そこでかかげられたものが何かによってきまってくるので、題目の提出によって一定の「課題の場」が設定されることになっている。上で示した「雪は」のように、助詞「は」が付随する部分が課題の場ということになり、「は」は題目を提示する働き、即ち「提題」の助詞ということになる。

(34 b) の場合には一般的な性質の叙述ということが出来るが、(37) のような場合にはどうなるだろうか。

(37) これは 私の鉛筆だ。

これに対して佐久間は、特定の限定された、現前の場の事物、または関説された既知の事物について、判断し、措定、叙述するものであり、(34 b) と (37)

の間の「は」の働きには「一般」と「特殊」と言う対立が見られるとしている⁽¹⁸⁾。

以上、松下文法と佐久間文法における「は」と「が」の扱いについて概観したが、彼らの考えの中にはすでに現在の語用論で述べられているような主張が含まれていると言えよう。

7. 情報伝達における「は」と「が」の役割

以下では、上のセクションで述べたことをもとに「は」と「が」の働きについて特に重要な点を挙げることにする。

〈1〉 有題文・無題文

我々が相手に何かを伝えようとする時、およそ2種類の伝え方があるように思われる。その1つは突然目の前に起こったことや現実に眼前で展開している事柄について相手に報告する場合であり、(38)がその例である。

- (38) a. あっ雪が降っている！
 b. 太郎が来ていません。
 c. どちらが吉田さんですか。
 d. テニスの出来る人が一人もいないのよ。
 e. (むかし、むかし) おじいさんとおばあさんがありました。

(38 a) は誰かが突然窓の外を見て雪が降っていることに気づき、他の人に報告するような場合である。(38 b) は集合時間になったので先生が生徒に「みんな来たかな」と聞いたような場合の答えである。(38 c) も目の前にいる数人の中から特定の人を捜し出す時に使う表現である。(38 d) は、例えば会社の同僚をテニスに誘っても誰一人テニスが出来ないので、別の友人に不平を言っているような場合である。(38 e) は昔話の出だしであるが、このように話すといかにも目の前でストーリーが展開しているようになる。これらいずれの場合も、今まで展開して来ている話の主題として、特にある部分を取り立てて

いるものではない。話の主題というのは、上でも述べたように、今までの話に連動したもの——つまり今までの話の一部をひきずる内容、旧情報であることが多い。しかし、(38 a) (38 b) はいずれも聞き手の知らない新しい情報を提供するものである。(38 c) は聞き手に話し手の知らない情報を教えてくれるようにもとめているものであり、(38 d) では突然話し手が新しい情報を差しはさむ場合である。(38 e) はお話の出だしであるから聞き手（読む側）には全く前提のない事柄である。このように、「が」を用いた(38)の例ではすべて主題となる部分の含まれない、聞き手の知らない新情報が中心となっている文である。このような文を無題文と呼ぶことにする。

もう1つの伝え方を示すのが、(39)の例である。

- (39) a. 雪は白い。
 b. 象はおだやかな動物です。
 c. 太郎は来ていませんね。
 d. 吉田さんはあの人です。
 e. あの川は水がとてもきれいだ。

(39 a) (39 b) では、「雪」ならびに「象」の特徴について述べているものである。これは山田(1936)によると、判定弁別の意味を表すものとされるが、「雪」「象」が主題として取り立てられ、後に続く述部では取り立てられたものの特徴について述べている。(39 b) を例にとるならば、まず「何かがあり、その何かとは象のことである」と主題提示し、そのあとで「象＝おだやかな動物」と陳述していることになる。(39 c) は太郎が話題になっている時に、「そう言えばその肝心な太郎が来ていない」と言うような場合に可能な表現である。従って、太郎は主題であるしまた旧情報でもある。(39 d) は、例えば「吉田さんはどちらの方ですか」と言うような問に対する答えとして適切な表現である。この場合その場に吉田と言う人物がいるということが前提となっている。従って、「吉田さんは」は主題として機能することになる。(39 e) は、例えば四国の四万十川が話題になったような時に、誰かが突然発話したとしよう。この時には「あの川」と言っても話し手、聞き手の両方に具体的にどの川

なのか意識にのぼることが出来るので、当然「あの川は」は主題であるとともに旧情報でもある。このように、助詞「は」に付随する名詞句は主題として機能するので、(39)で示したような文は有題文と呼ぶことにする。

次に「は」を用いた(40)のような例を考察することにする。

- (40) a. 私は帰りますが、あなたは残りますか。
 b. 兄はコーヒーが好きで、私は紅茶が好きです。
 c. 僕はコーヒーだ。
 d. 東京は神田の生まれです。
 e. 魚は鯛がよい。

(40 a) (40 b) はいわゆる対照の「は」と言われるものであるが、上でも述べたように、主題を提示するか、対照を示すかは文脈による。従って、これらの例では「私」と「あなた」、「兄」と「私」が取り立てられて、(40 b)で言うならば「兄については～だ」が「私については～だ」と2つの主題について陳述していることになる。(40 c)は喫茶店でコーヒーを注文する時に見られる表現である。日本語は文脈に依存する表現を極めて多く用いるが、これこそ文脈依存の典型的な文である。この文は喫茶店と言うような特定の環境で用いられると「僕の場合、注文するのはコーヒーだ」の意味を表し、決して「僕＝コーヒー」の意味にはならない。ここでも「僕」がやはり取り立てられている。(40 d)は「東京」と言う大きな場所を「神田」と言う特定の場所に限定する文であるが、ここでも「東京」が取り立てられていると見ることが出来る。(40 e)は、柴谷(1978)によれば、包摂する関係を表す文である。即ち、「鯛」は「魚」に包摂される(こう言う場合、魚を上位語、鯛を下位語とも言う。この場合も「魚」と言うものを特に取り立てて、「魚に関して言えば、(私は)鯛がよい」と言う意味を表す(もちろん(40 d)も包摂関係にあると見ることが出来る)。

(40)で示した例はすべて、「は」の付随した名詞句が取り立てられ、また主題としての機能も有していると考えられるので、有題文と見なしても差し支えないであろう。

〈2〉「は」によって表される一般性・特定性

「は」は(41)に挙げるように、一般的な事柄・一般的真理を表す場合に用いられる。

- (41) a. 地球は丸い。
 b. 夏は暑く，冬は寒い。
 c. すべて国民は法の下に平等であって，人種，信条，性別，社会的身分……において，差別されない。
 d. 人間はいつかは死ぬ。

このように，一般性を表す時は「は」が普通であるが，これを「が」と置き換えると座りが悪くなるか全く変な文になってしまう。例えば，(41 a)を「が」と置き換えて「地球が丸い」とした場合を考えてみる。教師が生徒に「何か丸いものを挙げてみて下さい」と言ったとする。生徒が次々に「ボール」「スイカ」などと挙げ，最後に誰かが「あっ，地球が丸いよ」と言うような状況でないと「が」が認められない。

(41)のような状況で何故「は」が用いられるのだろうか。聞き手にいきなり，主題として「地球は」「夏は」「冬は」「人間は」と提示しても，聞き手にはそれらを特定化することが特に困難にはならない。地球はこの世に1つしかないものであり，夏，冬，人間と言っても，文脈からこれは一般的なことを言っているということが分かるからである。(41 c)は憲法を頭に置いていることがわかっていれば，日本国民一般を指すものであることが自然にわかるはずである。このように，これらの主題は，何ら聞き手には特別新しい情報としては機能しないのである。これは新情報でないものが主題に選ばれるのがより自然である，即ち「は」によって取り立てられる方が日本語として全く座りの良い文になることを示している。

個人の特徴を表す表現も当然「は」を用いた方が自然である。

- (42) a. 太郎は背が高い。

b. 私の父はもう高齢である。

背の高さや年齢の進行などは、ある特定の個人の特徴であり、当然その主体となるべき主語として特定の人間が表されることになる。聞き手にも話し手にも意識にのぼる特定の人物（従って当然旧情報）が、主語にならなければならない。上で述べたように、このような場合には、日本語では主語が「は」によって取り立てられて主題化することになる。例えば(42 a)が「が」を用いて表されると、「誰が背が高いですか」などと言う文脈を与えないとかなり座りが悪くなる。

次に(43)の例を考えてみる。

(43) a. 犬は吠える。

b. 犬が吠える。

この例では、「犬」が特定の犬を指すかどうかは、統語的には何も表されていない。従って、(43 a)では「犬」が主題として、話し手と聞き手の両方の意識にすでにのぼっている情報（即ち旧情報）とは捉えにくい。だが「吠える」と言う動詞は、特定の個体の特徴とも、ある種（この場合は犬と言う種）の特徴ともとれるものである。

「は」が一般性を表す時に用いることが出来るということから、(43 a)は犬という種全体を指し、「犬というものは吠えるものだ」と解することが出来る。一方、(43 b)は決して犬の特性を表すものとは解することができない。

「が」の持つ眼前描写の特徴から、ある特定の場面で犬が吠えると解されることになるはずである。(43 b)は、例えば、芝居のト書で「ここで犬が吠える」とあったり、あとにまだ話を続けて「犬が吠える時には……」とすれば全く自然になる。以上から、主題には話し手と聞き手の両方の意識にのぼっているものがなっただ方が、より自然な文になるということを示していると思われる。この点について、もう1つの例を基に考えてみよう。

(44) a. ?木は高い。

b. ?箱は空だ。

「高い」「空だ」などは、特定の個体の特徴を表すものであり、一般性を表

す事は出来ない。従って、特定化していない名詞が主題として用いられている(44)は、はなはだ座りが悪くなっているわけである。これを話し手にも聞き手にも意識にのぼっていることを示す「あの木」「この箱」などとすると全く問題のない文になり、情報伝達においてもスムーズに問題なく運ぶことになる。

以上の分析から、「は」の一般性と特定性の判断は述語の性質にも大きく依存するということが出来よう。

〈3〉「が」のあらわす特定時

「が」については眼前描写——即ち話し手の目の前で起こっていること・展開することを述べる——に用いられることはすでに述べた。(45)がその例である。

- (45) a. あっ、雨が降っている。
 b. ほら、空が真っ青でしょう。
 c. 太郎がまだ来ていません。

これらの例が示すように、話し手の発話の直前、あるいは発話時に起こったことを前提なしで聞き手に伝えるような場合には「が」が用いられる。従って、「雨が」「空が」「太郎が」は聞き手には未知の情報である。「が」の付随する名詞句が聞き手には未知の情報であることを示す一番良い例は次の2人の対話である。

- (46) 「責任者はどなたでしょうか。」
 ——「私が責任者です。」

「私が」は求められている質問の答えであるから、当然聞き手には未知の情報になるわけである。

眼前描写とは一体いかなることか。もっと他の例と一般化できないものだろうか。そこで上で挙げた「犬が吠える」と言う例でもう少し考えてみよう。この文はこのままでは座りが悪いことは上で述べたが、芝居のト書などで「その時、犬が吠える」とすれば許されるであろう。「その時」のような特定の時間指定をしてやれば、座りの悪い文でも問題がなくなる場合があるようだ。この

文はまた「犬が吠える時は、近くに怪しい者がいるかもしれない」のように、特定の時間を指定する節を構成する時には全く問題が無い。(46)の新情報を提供する「私が責任者です」においても、この考えを当てはめることができないだろうか。ある特定の場面（従って特定の時間に拘束される）における情報の提供と見れば、特定時と結び付けることが出来るかもしれない。

鬼山信行(1991)は「が」を持つ文について、「『が』を持つ文の述語は、常に特定の時と関係をもたねばならない」と言う一般化でとらえることができると述べている⁽¹⁹⁾。鬼山に従えば、次の(47a)が座りが悪いのは述語の「哺乳動物である」が特定の時間と結び付けにくい——即ち一般性を表す述語である——からであるということになる。それ故(47a)が許されるのは、「何が哺乳動物ですか」と言うような特定の場面状況における答えとして捉えない限り適切な文にはならないのである。それに対して、(47b)が許されるのはどうしてだろうか。

(47) a. 鯨が哺乳動物である。

b. 鯨が哺乳動物であることは、常識だ。

(47b)では「鯨は哺乳動物である」が主語の一部を形成する複文である。従属節の時間は主節の時間に拘束されるが、鬼山の主張では一般原則で挙げた「特定の時」とはこのような従属節の拘束される主節の時間にも押し広げることができると述べている。この主張に従えば、日本語の複文の従属節の主語は主題化されて「は」が用いられることがなく、「が」が用いられるのが自然であることの説明になる。

8. 結び——述語のテンス・アスペクトなどとの関係——

今までの考察から、「は」「が」の使い分けには述語の性質も大きく係わって来ることが分かった。例えば、その述語が一般性を表すことが出来るかどうか「は」と「が」の選択に係わる。この場合に「は」が用いられるのは、一般性というものは特定の時間に縛られる事が無いからである。それ故、セクショ

ン7で挙げた「が」の一般原則が生きて来ることになる。

個人の特徴を述べるような述語が用いられる時に「は」を使用するのは、その述語の主語には特定の個体が現れなくてはならず、その主語は必ず話し手と聞き手の意識にのぼる個体でなければならない——即ち旧情報が主語であり、かつ話の中心をなす主題として取り立てられなければならないからである。

「は」は主題の取り立て機能を持つ助詞である。

それでは「は」は特定の事柄を主題として取り立てながら、何故一般的なことも表すことができるのだろうか。「鯨は哺乳動物である」と言うような一般的事柄では、「鯨は」といきなり主題として取り立てても、述語の特質から聞き手には何ら理解の妨げにはならない。一般的な事柄というものはすぐに聞き手の意識にのぼることができるからである。「は」を用いた文の一般性・特定性も情報伝達上の主題の役割、情報の新・旧、述語の特質などを考慮に入れるならば理解ができる。

次に動詞の時制が「は」「が」の選択にどのように係わっているか考察する。上で述べたことを考慮すれば、特定の時間に言及する時は「が」用いられるはずである。

まず、過去時制から見ることにする。

- (48) a. 太郎がボールを打ちました。
b. 太郎はボールを打ちました。

(48 a) は当然特定の時間——ここでは発話時——に拘束されるから、目の前で起こっていることの報告である。これに対しては、(48 b) 太郎を主題として取り立て、過去のある時点での太郎の行為について述べたものである。寺村(1991)の言う対比を示すような影が読み取れるとすれば、「太郎はボールを投げました(が、次郎は投げませんでした)」と言うような解釈も可能となる。もちろんこの場合も、太郎は前の文脈のつながりから、話題の中心——主題となっているのは当然である。

特定の時間に関係付けられるかどうかの違いがもっとはっきり出るのが、現在時制の場合である。

- (49) a. 太郎がボールを投げます。
b. 太郎はボールを投げます。

(49 a) は特定の時間に束縛されるわけであるから、「今、太郎がボールを投げます」を表すと同時に、久野(1973)の言う総記の意味、即ち、「今、(他の誰でもなく、まさに)太郎がボールを投げます」と言う意味も表すと思われる。一方、(49 b) は太郎を主題として取り立て、太郎について叙述する——つまり太郎の行なおうとする行為について述べる——ものである。さらに時間の拘束を受けない解釈をすれば習慣的な意味を表し、「(野球をする時はいつも)太郎はボールを投げます」が可能と思われる。もちろんこの他に、「太郎はボールを投げます(が、次郎は投げません)」などと言うような対照の意味にも解釈が可能である。

このように現在時制では、特定の限られた時間の解釈が自然なケースでは「が」が、特定の時間にとらわれない解釈が可能な場合には「は」が現れる。この違いは(50)で示す進行相を用いた場合にもっとはっきりする。

- (50) a. 太郎が走っています。
b. 太郎は走っています。

(50 a) は発話時に束縛されるから、今、目の前で太郎が走っている様を報告する文である。それに対して、(50 b) は特定の限られた時間に拘束されないと解釈すれば、話題になっている太郎の習慣——太郎が毎日ジョギングしていることを相手に伝える文として解釈可能である。(50 b) も当然対照の意味に解することができる。

特定の時間か否かが係わるもう1つの例を考察してみよう。

- (51) a. ビーヴァーはダムを造る。
b. ビーヴァーがダムを造る。

(51 a) はビーヴァーという動物の一般的な性質を述べたものであることは、今までの考察から明らかである。(51 b) では「が」の特質から特定の時間に拘束されているとすると、映画のシーンのナレーションで、ある特定のビーヴァーの行動を報告するような時に可能である。(51 a) と (51 b) では、ビ

ーヴァーに関して、一般対特定の対立が見られる。一方、(51 b)には久野(1973)の言う総記の意味——動物のなかでもビーヴァーだけがダムを造る——と言うような意味もある。このように「が」を持つ文は、特定の時間に束縛されない時には総記の意味に解釈されると思われる。

(51)の例を進行相で表すならば、どのような違いが見られるだろうか。

(52) a. ビーヴァーはダムを造っている。

b. ビーヴァーがダムを造っている。

(52 a) がやはり特定の時間に拘束されないとすれば、「(今の季節には、)ビーヴァーはダムを造っている(ものだ)」と言うような意味を表すであろう。

(52 b) は進行形を用いているために、特定の時間に束縛される——発話時に束縛される——ので、目の前で特定のビーヴァーがダムを造っている様の報告である。(52 a) はまた、「ビーヴァーはダムを造って(るが、他の動物は造っていない)」と言うような対照の意味にも解することが出来よう。(49)~

(52)の「は」構文では、特定の時間に拘束されない解釈はもちろんのこと、対照の解釈も可能である。その場合には、寺村(1991)の言う何らかの(対比の)影が意識されていなければならない。

英語では、このような一般性・特定性の意味の違いは、動詞の性質やテンス、アスペクトそれに冠詞などで表される⁽²⁰⁾。冠詞のない日本語の場合には、動詞の性質やテンス、アスペクトの他に「は」「が」がこの意味の違いを表すのに大きな役割を果していると言えよう。

「は」と「が」には文法的な違いがあるだけでなく、その使われ方の違いが様々な意味の違いを生じさせている。情報伝達と言う観点から考察すると、伝達される情報の新・旧、主題が取り立てられているか否か、特定の時間を念頭に置いて発話するのかどうか、対比すべき影が意識されているのかどうかなどが「は」と「が」を使い分ける大きな要因になるであろう。その他にも述語の性質、現在・過去と言うテンス、動作の進行などを表すアスペクトが意味の弁別化に影響を与えている。本稿では取り上げなかったが、発話内容に対する話者の態度・気持ち、即ちモダリティなども、日本語は発話の状況に大きく依存

する言語であると言う点を考慮に入れれば、「は」と「が」の使い分けに関与して来るのではないかと思われる。

<注>

- (1) 福地 肇 (1985):『談話の構造』新英文法選書 第10巻 大修館書店, p. 30 参照。
- (2) 聞き手が明らかに文脈から理解出来ると思われる旧情報は、文法的に許される限り省略されることがある。日本語では、特に旧情報の省略が多く見られる。例えば、「あの箱空だよ」と言う代わりに、もし聞き手にとってどの箱のことであるか自明な場合には、「空だよ」と言った方が日本語としてはより自然であろう。省略については、久野 暲 (1978):『談話の構造』大修館書店, 参照のこと。
- (3) 福地 肇 (1985), p. 75.
- (4) 三上 章 (1960):『象は鼻が長い』くろしお出版, 参照。
- (5) 山田孝雄 (1936):『日本文法學概論』寶文館。
- (6) 山田 (同) は、口語における格助詞として「が」の他に、「の」「を」「に」「へ」「と」「より」「から」を挙げている。
- (7) 山田 (同) は、係助詞として「は」の他には、「も」「こそ」「さへ」「でも」「ほか」「しか」などを挙げている。
- (8) 柴谷方良 (1978):『日本語の文法』大修館書店では、主語と主格は異なる範疇であるとしている。この違いについては、本稿24ページで考察する。
- (9) 柴谷方良 (同), pp. 221-241.
- (10) 山田孝雄 (1936), pp. 487-488.
- (11) 山田孝雄 (同), pp. 489-492.
- (12) 久野 暲 (1973):『日本文法研究』大修館書店。
- (13) グライスの言う会話の原則は協調の原理とよばれる。会話と言うものは、話し手も聞き手も一定の方向と目的をもって協力して進めないといけない。もし話し手、聞き手ともに相手構わず自分かってに話をするならば、これはもう会話にはならない。従って、会話とは話し手、聞き手の協同作業であると言える。グライスに依ると、会話には協調の原理と呼ばれる次の4つの要件が満たされなければならない。
 - ① Quantity (量): 過不足なく話す。余計なことを言っても、舌足らずでもいけない。
 - ② Quality (質): 内容について自信のあることを話す。うそは言わない。
 - ③ Relation (関連性): 状況に即したことを話す。無関係なことは言わない。
 - ④ Manner (様式): 明確に話す。曖昧に言わない。

- Grice, P. 1976. "Logic and Conversation", *Syntax and Semantics* Vol. 3, Cole, P. and J. Morgan (eds.), 参照。
- (14) 柴谷方良 (1990): 「助詞の意味と機能について—「は」と「が」を中心に—」『文法と意味の間』くろしお出版, pp. 281-301 参照。
- (15) 寺村秀夫 (1991): 『日本語のシンタックスと意味Ⅲ』くろしお出版, pp. 41~42 参照。
- (16) 松下大三郎 (1930): 『標準日本口語文法』中文館 (復刻版 勉誠社 1977)。
- (17) 佐久間鼎 (1940): 『現代日本語法の研究』厚生閣 (復刻版 くろしお出版 1983), pp. 194-214.
- (18) 佐久間 (同), p. 216.
- (19) 鬼山信行 (1991): 「ガを持つ文の統一的把握——特定の状況と特定の発話」, 日本言語学会第 103 回大会 (於南山大学) の発表。
- (20) 浅川照夫・鎌田精三郎 (1986): 『助動詞』新英文法選書 第 4 巻, 大修館書店を参照のこと。

<参考文献>

- 1) 浅川照夫・鎌田精三郎 (1986): 『助動詞』新英文法選書 第 4 巻 大修館書店。
- 2) Cole, P. and J. Morgan (eds.) (1976): *Syntax and Semantics* Vol. 3, Academic Press.
- 3) 福地 肇 (1985): 『談話の構造』新英文法選書 第10巻 大修館書店。
- 4) Grice, P. (1976): "Logic and Conversation", Cole and Morgan (eds.), pp. 41-58.
- 5) 橋本進吉 (1969): 『助詞・助動詞の研究』岩波書店。
- 6) 久野 暲 (1973): 『日本文法研究』大修館書店。
- 7) _____ (1978): 『談話の構造』大修館書店。
- 8) 松下大三郎 (1928): 『改撰標準日本文法』中文館書店 (復刻版 勉誠社 1974)。
- 9) _____ (1930): 『標準日本口語法』中文館書店 (復刻版 勉誠社 1977)。
- 10) 三上 章 (1960): 『象は鼻が長い』くろしお出版。
- 11) _____ (1965): 『日本語の論理』くろしお出版。
- 12) 大野 晋 (1975): 「助詞ハとガの機能について——現代日本語の基本的構文の意味」『文学 Vol. 43』岩波書店, pp. 1-16.
- 13) _____ (1978): 『日本語の文法を考える』岩波新書。
- 14) 鬼山信行 (1991): 「ガを持つ文の統一的把握——特定の状況と特定の発話」第 103 回日本言語学会の発表。
- 15) 佐久間鼎 (1940): 『現代日本語法の研究』厚生閣 (復刻版 くろしお出版 1983)。

- 16) 柴谷方良 (1978) : 『日本語の文法』大修館書店。
- 17) _____ (1989) : 「言語類型論」英語学体系 第6巻『英語学の関連分野』大修館書店, pp. 1-179.
- 18) _____ (1990) : 「助詞の意味と機能について—「は」と「が」を中心に—」『文法と意味の間—国広哲弥教授還暦退官記念論文集』くろしお出版。
- 19) Shibatani, Masayoshi (1990) : *The Languages of Japan*. Cambridge Univ. Press.
- 20) 田中章夫 (1977) : 「助詞(3)」『岩波講座 日本語7 文法Ⅱ』岩波書店, pp. 361-454.
- 21) 寺村秀夫 (1991) : 『日本語のシンタクスと意味 III』くろしお出版。
- 22) 山田孝雄 (1936) : 『日本文法学概論』寶文館。